かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英氏）

第 179 号

令和２年５月29日

編集　旭川医科大学
発行　教務部学生支援課

「桜」　（写真撮影：学生支援課）

令和元年度学位記授与式　学長挨拶
…… 学長　吉田　晃敏 …２
退職に向けて
…… 呼吸器センター　大崎　能伸 …４
定年退職に当たって
…… 産婦人科学講座　千石　一雄 …６
定年退職のご挨拶
…… 生理学講座（自律機能分野）　髙井　　章 …８
諦念褪色（ていねんたいしょく）の辞…… 歴史・哲学　藤尾　　均 …10
退職に当たって
ー生理学講座と入学センター教員としてー
…… 入学センター　坂本　尚志 …12
卒業にあたって…医学科第42期生　栗澤　圭輔 …14
卒業にあたって…医学科第42期生　藤保　洋祐 …15
これまでとこれからと
…医学科第42期生　桑原沙弥佳 …16
感謝の気持ちを込めて
…医学科第42期生　村上　　遥 …17
在校生に向けて…医学科第42期生　髙橋千奈美 …18
卒業にあたって…医学科第42期生　吉田　賢一 …19
卒業にあたって
… 看護学科第21期生　石川　遥菜 …20
卒業にあたって
… 看護学科第21期生　榎本いずみ …21
卒業にあたって
… 看護学科第21期生　小島さやか …22
私の大学４年間
… 看護学科第21期生　佐々木彩乃 …23
卒業にあたって
… 看護学科第21期生　土屋　瑠奈 …24
卒業にあたって
… 看護学科第21期生　西田　直生 …25
令和元年度定年退職教授による最終講義が行われました …26
学部学生海外留学助成制度を利用して
… 医学科第3学年　土田　勇気 …28
学部学生海外留学助成制度を利用して
… 医学科第4学年 阿部　　光 …29
卒業生の動向（医学科）……30
卒業生の動向（看護学科）……31
教員の異動 ……32

令和元年度 学位記授与式
学　長　挨　拶

旭川医科大学　学長　吉　田　晃　敏

医学科第42期生130名の皆さん、並びに看護学科第21期生59名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんを今日まで育てて来られたご家族の皆様の感慨もひとしおと思い、重ねてお祝いを申し上げます。また、医学博士の学位を取得された10名の皆さん、看護学修士の学位を取得された８名の皆さん、心からお祝いを申し上げます。共同研究者と苦労を共にした努力と、その結果生まれた皆さんの優れた研究業績に対し、深く敬意を表します。

さて、卒業生の皆さんが歩んできた期間を本学や社会の出来事と重ねながら振り返ります。

年度	医学科 第42期生	看護学科 第21期生	大学	社会
H26 (2014)	入学式		●図書館増改築が完了	●消費税 ５%→８%
H27 (2015)			●実験実習機器センター、 臨床第２講義室、 武道館（天井）を改修	
H28 (2016)		入学式	●世界初、クラウド医療を開始	●北海道新幹線が開通
H29 (2017)	白衣式	早期体験 実習Ⅱ	●ロシアとの交流を開始 ●アジアとの医療連携を開始	●ピョンチャン五輪開催
H30 (2018)	地域枠学生懇談会	保健・医療・福祉システム論	●吉田学長が北海道・サハリン州友好20周年記念祝賀会(サハリン州)に出席 ●「緑ヶ丘テラス」が完成 ●世界初、８Ｋ医療画像システムを導入 ●全医師(研修医含む)にスマートフォンを配付	●北海道胆振東部地震発生
H31 (2019)				●消費税 8%→10% ●平成から令和に

次に、医療分野やＩＣＴ分野における最新の動向と世界の情勢を踏まえた本学の「新機軸」を説明します。すなわち、①世界で初めて開発した3D-8K医療画像システムの普及、②世界で初めて開発した網膜血流計の国際治験の開始、③海外の医療従事者を教育するための国際医療支援センターの設立、さらには次世代の地域医療支援体制を構築するための④医療ドローンプロジェクト及び⑤医療アバタープロジェクトの開始、そして⑥「クラウド医療」のアフリカ展開です。この６項目の「新機軸」を推進し、人口減少や少子高齢化、地域間の医療格差など、世界が抱える様々な問題に対応していきます。

本学は、医学教育機関として国が進める「医療提供体制の改革」の中核となって機能し、地方創成に貢献することを第一の使命と位置づけ、次世代の地域医療を実践する医療者を適正な規模で養成し、適切な配置を推進しています。皆さんの先輩達も、全国の医療現場を始め研究機関や行政機関、そして海外の医療拠点などで活躍し、それぞれ高い評価を受けております。

後に続く皆さん達は、自分自身の努力を称え、自信を持って明日からの新たな第一歩を踏み出して下さい。

卒業、学位記取得、おめでとうございます。

なお、今年は新型コロナウィルスの感染拡大を防止する観点から、例年通りの「学位記授与式」を開催することはできませんでしたが、式を予定していた同時刻（令和２年３月25日午前11時）に学長だけが出席する「学位記授与式」を挙行し、その模様を卒業生・修了生に向けてＷｅｂ配信しました。当日、視聴できなかった方やもう一度視聴したい方のために、「学位記授与式」（Ｗｅｂ配信）の動画はＤＶＤで販売（ボーダレス・ビジョン株式会社：kizuna@blv.co.jp）しております。

退職に向けて

呼吸器センター
名誉教授　大　崎　能　伸

３月末日の退職に向けて机の整理をしていると、引き出しの奥から患者さんのご家族からいただいた手紙が何通も出てきた。いずれも、予後のよくない疾患に対して困難な治療を頑張った患者さんの奥様、母上、娘さんからのもので、当時の診療が思い出される。

1990年頃の進行肺癌の治療は併用化学療法が主体で、2-3剤の抗癌剤による４週ごとの治療が3-4コース行われていた。患者さんは良くなろうとの一心で治療を受けられるが、その治療の効果は満足とは程遠いものであった。若い患者さんも年配の患者さんもおられたが、いずれも苦しい治療にもかかわらず、治療の終了を目指して我慢しておられた。病棟の回診はいつも気が重く、あまり代わり映えしないばかりか、時にはどんどん進行してゆく病状を頭におきながら患者さんを励ますことが嫌で仕方がなかったことを思い出す。

大学病院の呼吸器病棟の重症疾患は悪性腫瘍ばかりではなかった。進行する感染により気管が壊死を起こして気道が確保できなくなってゆく慢性気管支炎患者、急性呼吸不全で救急搬送される気管支喘息患者、正常な肺がほとんどないのに歩行している肺気腫患者など、今では遭遇しないような重症疾患患者が多かった。

現在の呼吸器科病棟に入院している患者さんの治療を見ていると、呼吸器疾患の治療については隔世の感がある。肺癌の治療は、2002年に分子標的薬が登場してすっかり様変わりした。当時は、骨転位や脳転移のある進行肺癌は平均生存期間が10カ月程度に過ぎなかったが、現在は標的を持った進行肺癌患者に分子標的薬を用いると5年を超えて寛解を続ける例も見られる。治療による腫瘍の縮小効果については、抗癌剤での２割程度に対して7-8割の症例で腫瘍が縮小する。分子標的薬による治療に耐性になる例も多いが、最近ではそのような症例に対しても2次治療、3次治療の選択肢がある。最近では、免疫チェックポイント阻害薬が広く用いられるようになり、効果がある症例に対しては長期間にわたり病勢を制御できるようになった。なかには、治癒が得られているように思われる症例も散見される。

春先になると若い医師を悩ませていた、気管支喘息の治療の改善も目覚ましい。大学病院での外来担当医から、病棟にいる若い医師に外来での気管支喘息発作の患者の管理を依頼されるのであるが、長時間にわたる点滴を繰り返しても改善せず、外来から夜間外来に移動して治療を続け、結局改善しないために入院治療となる例も多かった。今は、ステロイドの吸入療法が奏功して、外来で点滴する症例はほとんど見られない。呼吸器の慢性感染症に対し

ては、マクロライドの少量持続療法が開発されて、増悪してゆく症例は少なくなった。

心の目で見ることを余儀なくされていた、胸部画像診断の発展もめざましい。何十枚にもわたるぼやけた胸部断層写真をシャーカステンにかけて読影し、頭の中で立体像を作っていた時代から、肺野の読影はできないと断言された初期のCTが導入されたのち改良を重ね、今では肺野が0.125mmの厚さでスライスされて、進歩した画像処理技術によって1mmに再構築された肺野の画像を読影する時代になった。肺病変の部位診断や質的診断は病理診断に迫るものがある。

患者さんのご家族のお手紙には、患者さんが最後まで医師を信頼してくれたこと、苦しい治療でも希望を持って頑張ってくれたこと、医師が無理な治療を工夫してどうにか続けたことなどについて記載していただき、終わりには感謝のお言葉を書いてくださっている。改めて読み返してみると、患者さんは自分の病気が良くなりたい一心で治療を続けていたのではなく、そばにいる家族、医療スタッフが安心するように苦しい治療を無理に続けていたのではないかと気がつく。私が治療して亡くなられていった患者さんとそのご家族に、今の新しい治療法と診断法について教えてあげたい気持ちでいっぱいになる。同時に、10年後の呼吸器診療のさらなる発展に対して大きな希望を持ちたくなる。

退職の日に、このようなことに気がつくようでは、まだまだ未熟だと思いながら、呼吸器内科医としての新たなキャリアーをさらに積みあげていきたいと思う。

定年退職に当たって

産婦人科学講座
名誉教授　千　石　一　雄

令和2年3月末で定年退職となります。

私は昭和48年に旭川医大に入学し、54年に卒業後産婦人科講座に所属、定年退職まで旭川医科大学で育てていただきました。

産婦人科へ入局した当初は「新たな生命の誕生」こそが産婦人科の真髄と単純に考えておりましたので、早く分娩や帝王切開ができるようになりたい一心で、周産期を専攻するつもりでおりました。しかし、大学院の研究テーマが「超音波断層法による卵胞発育・排卵のモニタリング」であったこともあり、当時脚光を浴びていました体外受精に次第に興味を抱き、結局、生殖医療の臨床と研究に専念してきました。当時の体外受精は今とは大きく異なり採卵時間の調整ができなかったため、土曜日、日曜日、早朝、深夜を問わず手術室に集まり採卵を行うというかなりハードな日々でした。しかも妊娠率は非常に低率で、いかにすれば妊娠率を上げることができるのか、試行錯誤の毎日であったと記憶しております。それでも徐々に生殖医療に興味を抱く仲間が増え、成績も少しづつですが向上していくのが楽しみでした。

また、精子、卵子の基礎研究も継続し、生物学教室の立野教授、上口名誉教授の指導の下、ヒト未受精卵子の染色体分析、マウス体外成熟卵の細胞遺伝学的正常性に関する研究は教室の先生方の博士論文になりました。また、体外受精の受精率の向上を目指し、培養液の開発、精子機能賦活化物質の同定と賦活化機序の解明、新たな配偶子凍結保存法の開発などに取り組んでまいりました。特にヒト卵子の美しさに魅了され、ヒト卵の受精時における卵細胞膜と精子細胞膜の相互作用としての卵細胞膜における多精子受精防御機構の解明に没頭し、私の主要な研究テーマとして長年にわたり研究を継続しました。その集大成として札幌で開催された第53回日本産婦人科学会のシンポジストに選出されたことは産婦人科医としては大変名誉なことでありました。

2005年4月からは産婦人科学講座の第3代目教授として清水教授や石川教授が築かれた伝統の継承と更なる発展のために注力いたしました。教授就任の翌年には福島県で前置胎盤症例の母体死亡事故で産婦人科医が逮捕される大野病院事件が起き、前年から開始された初期臨床研修の必須化など産婦人科にはまさに逆風が吹き荒れ厳しい教室運営でありました。特に臨床研修必須化が始まった当初の2年間の新入医局員は0で徐々にマンパワーの減少が顕

著化し、医局員に疲弊も目立ち、大学におけるアカデミアの遂行は厳しい状況となり解決策を模索するため悩んだ時期でもあります。それでも子宮内膜症性不妊の治療法、子宮内膜症の薬物治療に関する臨床研究、精子形成遺伝子とくに無精子症原因遺伝子の同定と機能解析などの基礎研究を継続し、旭川医大産婦人科は本邦において生殖医療分野で先端を走り続けることができました。これもひとえに医局員のたゆまぬ努力と旭川医大の皆様のご支援の結果であると思います。

また、平成17年からは教育センター長として10年以上にわたり学生教育に携さわれたのも貴重な経験でした。大学教官であっても臨床医として過ごしてきた時間が長く、初めて大学教官としてのあるべき姿を学んだように思います。就任当初は右も左もわからず歴代の教務部長、学生支援課長にご迷惑をおかけすることが多々ありましたが、何とか長期間にわたり努めることができ、ご支援いただいた教育センターの先生方や学生支援課の皆様には心よりお礼を申し上げます。旭川医大は教官と学生の距離が非常に近いと評価をいただいており、今後も病める人に寄り添いプロフェッショナリズムを身に着けた若き医療者を大学全体として育成することが重要であると思います。そのためにも学生教育のさらなる充実を願っております。

旭川医大は卒業しますが、今後は一産婦人科臨床医として私の原点である生殖医療ならびに地域産婦人科医療に貢献できればと考えております。

今後の旭川医科大学の発展を祈念しますとともに、長きにわたりご支援をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

定年退職のご挨拶

生理学講座 自律機能分野
名誉教授　**髙　井　　章**

私こと、令和2年3月末日をもって旭川医科大学を定年退職いたしました。平成13年(2001年)10月に生理学第一講座(現自律機能分野)の第二代教授を拝命して以来、本学には18年半の長きににわたりお世話になりました。この機会を借りて、関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

私は旭川医科大学が開学した昭和48(1973)年に名古屋大学医学部に入学、昭和54(1979)年卒業と同時に同医学部生理学講座に入り、まもなく助手に採用されました。それから今回の定年退職まで40年間、一貫して生理学畑の仕事に従事することになりました。

本学在職中は、名大時代の後半に手がけていた2つの課題に関する研究を継続して進めました。課題の一つは、視覚遠近調節を司る毛様体平滑筋の収縮調節機構に関するものです。パッチクランプ法、細胞内カルシウム濃度記録法、免疫蛍光顕微鏡法などに分子生物学的方法を織り込んだ手法による一連の実験により、アセチルコリンのムスカリン受容体から収縮蛋白系に至る信号伝達系の分子実体のほぼ全貌を明らかにすることが出来ました。もう一つの課題は、ドイツ留学時代(1986-1988)に始めた、蛋白質脱燐酸化酵素を特異的に阻害するオカダ酸やカリクリンAなどを代表とする天然毒素の分子作用メカニズムに関するものです。国内外の生化学、天然物有機化学の専門家との共同実験により、海綿毒素の一種カリクリンAとリコンビナント哺乳動物酵素蛋白との共結晶構造のX線解析を実現したのは私の旭川医大時代の前半における主な成果の一つです。その後、カリクリンAが海綿に共生するある種のバクテリアにより合成されたあと、脱燐酸化酵素阻害剤として活性化するために必要な分子修飾反応を触媒する酵素の同定に共同研究者とともに取り組み、定年直前になって、ついにその分子クローニングに成功しました。

管理運営面に関し、情報処理センター長(2007-2010)、情報基盤センター長(2011–2019)、学長補佐（2011–2014、教育・産学連携・情報担当)、副学長(2014-2018、教育・研究・情報担当； 2018-2019、研究・情報担当)などを拝命歴任いたしました。私がこれらの職にあった期間には、本学が財政面で大きな危機を経験した時期が含まれます。その時期には、教員、事務方、病院関係者が一丸となってその危機に立ち向かい、驚くべき短期

間に克服していった一部始終を、たまたま運営組織の内部から目の当たりにしました。

現在、新型コロナウイルスの蔓延により世界中が未曾有の混乱の中にあります。旭川医科大学の皆様におかれましても、教育、研究、診療など現場のすべてにわたり、再び大変な困難に直面されている様子が、大学を去った私などのもとにも毎日のように伝わってまいります。今回は、ウイルスという外的要素が原因である点、危機の性質は違いますが、前回に実証された本学の内蔵する強靭な反発力、対応力が今回も威力を発揮することは疑いありません。

本来であれば、未来に向かった旭川医科大学のご発展を祈念して結びとすべきところですが、このような状況のなか、とりあえず、皆様の現在のご苦労が報われて一日も早く事態が正常化されることをお祈りいたします。

諦念褪色の辞（ていねんたいしょく）

歴史・哲学
名誉教授　藤　尾　　均

私が旭川医大に着任したのは平成10年4月でした。多くの方々に支えられ丸22年が経過し、いよいよ定年（停年）退職です。

前半は、読者が極めて少ない専門の論文をチマチマと書きながら、先代歴史教授の原田先生や哲学教授の岡田先生の御指導を得て人文系教養教育にいそしみました。文系の専任教員が少ないのを良いことに、歴史や哲学だけでなく文学やラテン語などにも踏み込んで好き勝手な講義をさせていただきました。「教養は大切だ」とは巷間よく言われますが、これと「藤尾の講義は大切だ」とは断じてイコールではありません。にもかかわらず真摯に向き合ってくださった学生の皆さんには深く感謝いたします。ちなみに下の似顔絵は、授業中に氏名不詳の学生さんが描いて、15年ほど前の「裏シラバス」に掲載してくださったものです。

私の転機は平成19年7月に訪れました。第7代吉田学長の誕生と同時に思い掛けなく第16代図書館長を拝命することになり、以来、執行部の一員として活動して参りました。当初は、外科学の笹嶋教授、整形外科学の松野教授、皮膚科学の飯塚教授、数学の山内教授が副学長を務められ、この方々はいずれも吉田学長より数歳年上で、そのためもあり、学長が各副学長の御意見を斟酌しつつ落としどころを決めるという「共和政」の時代でした。私は図書館長として末席に座り、学長・副学長の御高説を拝聴できる大学運営会議を毎週楽しみにしておりました。

やがて、生理学の高井教授や外科学の平田教授・古川教授、それに不肖の私といった、学長と同年代の副学長が増えてくるにつれ、当然ながら、学長がリーダーシップを発揮される機会が増え、さらに解剖学の吉田教授、病理学の西川教授といった、かなり年下の副学長が誕生すると、学長のリーダーシップはますます強固に発揮されて参りました。良い意味での「帝政」の時代です。

帝政というと古代ローマのカリグラ帝・ネロ帝といった「暴君」を連想しがちですが、私が連想するのは、領土を最大にしたトラヤヌス帝などの「賢帝」のことです。それでもローマ帝国はやがて東西に分裂し、西は異民族の侵攻によってほどなく滅び、東は異文化に翻弄されて次第にアイデンティティを喪失していきましたが、吉田学長の薫陶を受けられた方々が学長の意を体してますます活躍していけば、本学はそんな悲惨な末路をたどることはない

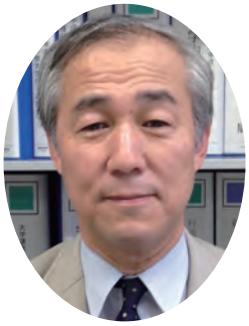
でしょう。

退職に当たり最終講義は辞退しました。拙い講義を義理で聴いていただくのは申し訳ないと思ったからです。大学主催の歓送式と一般教育主催の歓送会も辞退しました。関係各位が褒め言葉に窮されるのではないかと忖度した次第です。教授会主催の歓送会は新型コロナウイルス感染症流行のため中止となりました。結果的に、勿体なくも名誉教授の称号を頂戴してこの拙文を「かぐらおか」に遺すだけで、シンプルに大学を去ることになりました。「シンプル・イズ・ベスト」は私の信条に叶います。

「諦念褪色」などと自己を卑下したようなタイトルをつけました。しかし「諦念」の意味合いにも、「あきらめの気持ち」と「道理を悟って迷わない心」とがあり、後者と受け取ってくだされば幸いです。「褪色」もわるいことばかりではありません。淡い色には、けばけばしさがありません。

旭川医大は今年の11月に開学47周年を迎えます。そんな巡りあわせで、私は退職後、吉田学長の御高配を得て、非常勤で『旭川医科大学50年史』（仮称）の編纂に従事することになりました。とはいえ、前途は多難です。本学では開学当初から、本学関係の新聞記事を総務課（旧庶務課）の担当職員が熱心にスクラップして保存してくださっています。しかし、誰が命じたのか、ある時、西暦2000年以前の分がそっくり捨てられてしまいました。「前世紀の遺物」との判断によるものでしょう。とくに往年の「北海道新聞」旭川版は大学史編纂にあたって貴重な資料となったはずですが、もはや復元は望むべくもありません。しかも本学では、『10年史』は前掲の原田先生が中心になって編纂された立派なものがありますが、肝腎の『30年史』は作られませんでした（私には叙述の用命がありませんでした）。そのため、もはや判然としなくなってしまった事象も少なくありません。どのように復元していくか、思案を重ねています。

「賢者は歴史に学び愚者は経験に学ぶ」という名言があります。19世紀ドイツの宰相ビスマルクの就任演説に由来する言葉です。歴史と謙虚に向き合う姿勢がないと、本学も、ローマ帝国のような悲惨な末路を辿っていくかもしれません。そんな思いも秘めつつ、あと3年余、ときおり学内をうろうろしますが、引き続き御厚情を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。



退職に当たって
―生理学講座と入学センター教員として―

入学センター
名誉教授　坂　本　尚　志

生理学第二講座および入学センターの教授としては25年余り、大学院を卒業して助手（当時）として採用となった時から数えると、36年の教員（教官）生活を終えることとなります。途中千葉大学の助教授としての3年余りを除いて、長く母校旭川医科大学の教員をさせていただいたことに、心から感謝いたします。

仕事柄、高大連携で高校生に話す機会があるが、その際「人生には何度か選択の時がある。選択肢はそれまでの何年かの間に行ったことに応じて出てくる。とりあえず、世の中の誰かが何処かで観ていると思って、結果を受け止める覚悟で目の前にある好きなことを精一杯やりなさい。」と伝えている。

大学院時代、恩師である初代生理学第二講座森茂美教授から「どんな発表でも、前と同じことではなく、一歩でも進んだ結果を加えなさい。世の中の誰かが何処かで君を観ている。」と教えられた。大学院修了後、教官になり、アメリカ留学し、講師、助教授となり、教授として旭川に戻ってきたのも、目指して成し遂げたのではなく、世の中が私に選択肢を与えてくれた結果だったと思う。

教授として自らの研究を、と思って戻ってきたが、昔入学したときに理不尽と思った教育制度（選択の余地のない選択科目（3科目から2科目選択）、単位制と学年制の矛盾（1科目認定されないと1年留年）等）が依然として続き、試験にさえ通れば良いという態度の学生を前にして暗澹たる気持ちになり、教育改革の必要性を感じた。そこで研究の傍ら教育改革に取り組んだ。それまで3-4年毎にあった選択の時がやや延びて、9年目に入学センターに移るよう現学長（当時眼科学講座教授）に助言されたのも、世の中の与えてくれた選択肢と思い、異動した。9年の間に動物施設長や情報処理センター長も務めたが、自らの母校が誇りに思える“良い大学”になってくれること、そのために、自分が出来ること、自分の目の前にあることに精一杯取り組んでいただけであった。

20年以上の生理学者のキャリアを捨てて入試に専念するのに若干の不安はあったが、今日地方国立医学部の中で、自大学卒業者の歩留まりは最高となっている。地域枠拡大と卒業生確保のために、10年一仕事と思って移って、何とか結果は出せたかと思っている。しかし、大学入学共通テスト導入等入試制度が大きく変わる。医学部定員を増やし、団塊の世代による一時的な多死社会を乗り切るために、本学創設時の600人に1人が医学部に入れる時

代から、100人に1人が医学部に入れる時代に変わっている中で、どのような学生を集めるか次の課題が残ってしまった。

残っているといえば、教育改革の時に、臨床を始めてから哲学や倫理学を学びたかったという学生の声を反映して、1年から4年まで好きな時に選択科目を受講出来て、1〜2年、3〜4年の留年を無くした新カリキュラムを作成したが、3年で元に戻り、今日の学生の態度が昔と同じようになっているのも、心残りである。

生理学すなわち生物の理（ことわり）を講義するときに言うことであるが、生物の定義は自己保存、種族保存、恒常性の維持の3つである。ヒトの行動も結局この定義に沿っているように思える。しかし、社会的動物として自己の欲求を抑え、他者に配慮して行動するための倫理観、すなわち如何に生きるかがヒトには求められる。博士号PhDはDoctor of Philosophyの略であるが、どの道の研究も最後はPhilosophy哲学に繋がるというのをつくづく感じる。技術の進歩で、スマホがあれば世界最先端の知識が手に入る時代である。教員の仕事は講義で知識を伝えることより、如何に生きるか導くこと、教養が身に付くよう導くことが最も必要なことと思う。グローバル社会において、これから母校が国際的に飛躍することを祈念して、退職の挨拶とさせていただきます。

卒業にあたって

医学科第42期生　栗　澤　圭　輔

新入生の春、まさにこの「かぐらおか」で先輩方の文章を読んでいた記憶があります。あれから6年を経て、自分が卒業生として寄稿の機会を頂けたことは大変喜ばしく、光栄に思います。

6年間で学んだことは全てが自分の夢に直結するものでした。基礎医学を経て臨床医学。人体の複雑さと精巧さに驚きつつ、様々な疾患を学ぶ日々はいつも新鮮で、早く臨床実習に出たいと常々思っていました。実際の臨床実習は戸惑うこともありましたが、患者さんに身体診察や問診を行う過程は大変興味深く、やはり自分が選んだ道は間違っていなかったのだなと実感できる毎日でした。Med-Eduという小中高生に健康教育を行う部活動では、年次分け隔てなく議論を行い「わかりやすく伝えるにはどうしたらよいのか」を突き詰めることができました。学校の先生を始め、地域のみなさんと様々な交流ができたことも大きな財産です。2010年発足のまだまだ若い部ではありますが、先輩方が残してくれた貴重な機会を活かしつつ、後輩達にはさらなる学びに繋げてもらいたいと思います。

卒業生として新入生、在校生のみなさんに伝えたいのは「心身の健康が第一である」ということです。大学生だからまだ行ける！という強がりの向こうに重大な結果が待っているかもしれません。また私自身が在学中に大切な友人を亡くしているように、同年代(AYA世代)でも突然病に倒れ、命を奪われてしまうことさえあり得るのです。どうか自分には関係ないことだと思わず、日々の健康管理を大切にしてください。

将来は免疫・血液系疾患を専門にし、病気と共に生きていく慢性期の患者さんにより添えるような医師を目指しています。自分は今やっとスタートラインに立ったばかり、いつまでも初心を忘れず研鑽を積んでいきたいと思います。最後にこれまでお世話になった全ての方に感謝を申し上げ、結びの言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

卒業にあたって

医学科第42期生　藤　保　洋　祐

18歳の春、旭川医科大学に入学してから、6年の月日が経ちました。早いものだなあと感じる一方で、社会に出て仕事をすることへの、6年前と何か似たような期待や不安を抱き、原稿を書いています。

大学生活を振り返った時に、一番に浮かぶものは部活動です。小4から続けてきた野球を大学でも続けられることが嬉しくて、すぐに入部を決めました。4年生の時には主将を務めさせていただき、東医体優勝も経験することが出来ました。結局6年生まで続けましたが、この6年間で同期、先輩、後輩、年齢も性格も大きく異なる様々な人と出会い、多くのことを学び、人として少し成長できたかなと思っています。

学業に関しては、下級生の時は問題なく進級できる程度にテスト期間に合わせて勉強し、無難にこなしていました。しかし上級生になり、臨床実習を回ると、教科書と実際の医療現場のギャップを感じました。知識・技術・経験、その全てが今の自分には全くないことを実感しました。そこを補うために、勉強はもちろんですが、患者様とのコミュニケーションにも重きを置きました。自分が担当させていただいた患者様とその数か月後に院内のローソンで遭遇したときに、「お久しぶりです。今日は外来で来ていますが、おかげさまで退院して元気にしています。あの時はたくさんお話を聞いていただきありがとうございました。」と声をかけていただいたことは今でも自分の心に残っています。

国家試験も終わり、卒業旅行は苦楽を共にした同期とアメリカに行き、車で観光名所を回りました。最後まで充実した学生生活だったと感じています。

6年間の生活を支えてくれた家族、先輩、後輩、同期、先生方、職員の皆様、実習で貴重な経験をさせていただいた患者様とその家族の皆様に心よりお礼申し上げます。これからは社会人としての自覚を持ち、医療の現場で活躍できるよう精進します。

これまでとこれからと

医学科第42期生　桑　原　沙弥佳

私にとってこの6年間は、人生で一番充実した瞬間でありました。まずは卒業にあたり、支え続けてくれた家族と6年の間に出会った皆様に心から感謝申し上げます。

ワクワクとした気持ちと不安を抱いて始まったこの6年間、始まりの瞬間から卒業まで同期や先輩に沢山支えていただきながら過ごしてきました。1人ではなにも為し得なかったと思います。

止め処なく迫ってくる試験、学校祭、部活、留学、臨床実習、国家試験と、楽しい時も辛い時もすべて家族や同期、先輩や周囲の人の力無しには最高の結果は得られなかったと思います。本当に感謝してもしきれません。感謝の気持ちと沢山の思い出を力に変えて、これからも精進して行きたく思います。

学生でいられる6年間は非常に貴重なものです。いつどの瞬間にどんなチャンスが現れるかもわかりません。素敵な出会いに恵まれ、導かれるように色々な事に挑戦できた様に思います。皆様にも「6年間後悔なし」と自分の心に言えるように、やりたい事を出来る限り挑戦してほしいです。とはいえ、学業やバイト、やるべきタスクなど忙しい事もあります。どのように時間を過ごすか、何を為すかは自分次第です。自由です。今の自分に何が必要か、要らないと判断した事は切り捨てて後悔のない過ごし方をしたいものです。難しい事ではありますが、私もこれから努力したいと考えます。

また、6年間で恵まれた出会いはかけがえのないものです。6年間で一生の仲間もできたと思います。日本でも海外でも、どの出会いも私にとって宝物です。沢山の刺激を受け、沢山の学びを得て、沢山笑った思い出は私をずっと励まし続けてくれます。
皆さんも築かれる人間関係をどうか大切にされてください。

6年間は一過程にすぎません。新たなスタートラインにたって今、少しのワクワクと不安、6年前と同じ気持ちです。社会人として医師として、支えてくださった方々に少しでも恩返しできるよう、また社会の一員として貢献できるように日々精進したく思います。

重ね重ねお世話になった皆様に心より感謝申し上げます。

感謝の気持ちを込めて

医学科第42期生　村　上　　遥

6年前、私は一人の知り合いも友達もおらず、これからどのような生活が待っているのか不安な気持ちで、生まれ故郷の宮城県から北海道にやってきました。しかし、そんな心配は杞憂で、北海道の方々はみなとても優しく、私を温かく迎え入れてくださった下宿のおばさん、おじさんの優しい笑顔が今でもありありと心に思い浮かびます。

旭川医大で過ごした6年間を振り返ってみると、勉強に部活に走り回った日々でした。私は入学時、医師になるからには勉強不足は許されない、できる限り知識を吸収する努力を続けるという覚悟を決めました。しかし、入学していざ勉強を始めると、さっそくその知識量に圧倒され、実習やレポートにも忙殺されました。そこで限られた時間の中、医学の知識を吸収するためにはどうするべきなのか、まずは色々な本を読んで自分に合った勉強習慣の確立に努め、授業はできるだけ予習・復習し、毎日こまめに勉強する習慣をつけました。テスト前などは知識の海に溺れ、沈みそうになる感覚を何度も味わいながら、それでも苦しい時ほど自分の限界を超えるチャンスだと信じて頑張ってきたような気がします。

部活では卓球を続けてきましたが、ここでは体力や気力を養うとともに、人間としての幅を少しでも広げることができたように思います。合宿で一日中卓球をして全身筋肉痛になったり、大会で全国各地をめぐり仲間とともに戦い、そして笑い合ったりしたことはとても良い思い出です。

他にも、ここには書ききれないほどたくさんの思い出がこの6年間には詰まっています。その中で今一番心に浮かんでくるのは、これまでお世話になった方々への深い感謝の気持ちです。先生方や職員の方々、友達、先輩・後輩、下宿のおばさん、おじさんとその家族の方々、家族など、多くの方々に支えられ励まされてきました。本当にありがとうございました。支えていただいた分、これからも努力を続け、少しでも世の中の役に立てるよう頑張っていきたいです。

在校生に向けて

医学科第42期生　髙　橋　千奈美

私は違う大学を卒業してから旭川医科大学2年次後期に入り直した編入生である。人より大学生活を長く過ごした者による、学生生活をより楽しく充実させるための1つの提案としてこれを読んでいただければと思う。

興味のあることはとことん突き止めること。私の周りでも、将来海外で働くことを考えている人は長期休暇を使って海外留学したり、USMLEの勉強をして合格している友人もいた。興味がある研究室に出入りする人もいた。かく言う私も、編入学前から興味がある分野があり、麻酔科にお邪魔して研究を手伝わせてもらい、4年生の10月にアメリカ麻酔科学会でのポスター発表というとんでもない大役をやらせていただいた。私自身英語に苦手意識を持っていて、発表も質疑応答も後悔ばかり残るものとなってしまったが、今となっては良い思い出であるし、学生の身分である自分に発表の機会を与えてくださった麻酔科の先生方には本当に感謝している。

部活動が全てではないと思う。もちろん部活動で東医体での良い成績を目標として学生生活を全うするのも1つの過ごし方である。自分自身も陸上部に所属したことでマラソンに目覚め、フルマラソン完走という目標を達成することができた。部活動に所属することで得られた先輩後輩関係もとても貴重である。ただ、自分が活躍できる場所は大学や部活動以外にもあるかもしれない。私の場合、趣味の登山やクライミング、スノーボードなどでもたくさんの人と知り合えた。自分の知らない業種の人たちの話を聞くことは新鮮だし勉強にもなる。是非自分の興味を学内に限定せず、目を外にも向けてみてほしい。

臨床実習を大切にしてほしい。将来働く科を決める際の参考にもなるし、実臨床で働く先生方の生の声を聞く貴重な機会でもある。5、6年生になると国家試験が近づいてきて、実習より勉学を優先させる者も出てくる（私もそうであった）が、これはとても勿体無いことだと実習が終わってから気づいた。皆さんには同じ失敗をしないでほしい。

以上、参考にしていただけたら光栄である。

卒業にあたって

医学科第42期生　吉　田　賢　一

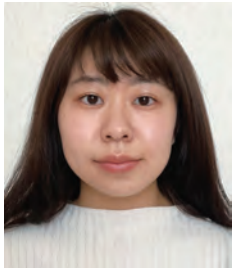
旭川医大に編入学してから4年半ほど経ちました。旭川東高校から北海道大学を卒業して自衛隊歯科医官として札幌を中心に勤務し、医学を学びたいという志を持つに至った次第ですが、早いものでここに「卒業にあたって」を書く機会を頂きました。

入学してまず感じたことは、同期生が多いということです。たくさんの仲間がいるということは卒業後に専門が細分化する医師にとっては頼もしいことです。はじめは年齢の差があるため適切な関係が築けるか心配もありましたが実習・部活を通して素晴らしい仲間ができたことを嬉しく思います。解剖学実習を必死に勉強したことや臨床実習でプレゼンの資料を深夜まで作成したことも良き仲間との楽しい思い出です。地域医療実習では遠軽に赴き、近隣の医療資源の不足した地域への巡回診療や在宅での難病治療への支援、自衛隊外来など地域での医師・病院の役割を学ぶことができました。北海道は札幌・旭川などの医療資源の充実した地域以外にも道北・道東と広大で抱えている医療の問題も様々であり、本学の重大な役割の1つが地域医療であることを実感します。部活動ではソフトテニス部に所属し、東医体に参加するなど貴重な経験ができました。部員の活気は凄まじく、自分も頑張らなくてはという気持ちになります。

人生で2回大学に通うということはそうあることではないでしょう。私が本学の卒業に至るまでには多くの人に支えられてきました。編入学試験の推薦状を書いて頂いた北海道大学の教授、受験のための退職を許可してくださった前職場の方々、医学を指導頂いた旭川医大の先生方や支えてくれた妻・家族など感謝の念に堪えません。旭川医科大学で学んだことを以て社会に貢献していくため、医師として勉学に励み研鑽を積んでいきたいと思います。ありがとうございました。

卒業にあたって

看護学科第21期生　石　川　遥　菜



旭川医科大学に入学してからあっという間に4年が経ち、この春無事に卒業を迎えることが出来ました。大学生活を振り返ってみると、勉学だけでなくサークル活動やアルバイトなどを通し、様々な方と出会ったことで充実した4年間を過ごすことが出来ました。

私が看護師を目指したのは、小学校就学前の頃で、病院で働く看護師さんへのあこがれがきっかけでした。幼少期のぼんやりとした看護観は、4年間の学習を経て、具体的で深みのあるものになっていきました。中でも、看護学実習で出会った患者さんをはじめ、最前線で働く看護師さんを見て、看護とは何かを問い続けることが最も大事な時間であったと思います。時には、自分が何をすべきかわからなかったり、突き詰めることが辛くなったりと、行き詰まることもありましたが、頼れるグループメンバーや先生から助言を頂いたりすることで、自分一人では辿り着くことのできなかった考えに至ることができ、とても嬉しかったことを覚えています。一緒に実習してくれた5人のメンバーとは、夜遅くまで課題をこなしたり、悩んだりと切磋琢磨したのも良い思い出です。

これから実習を控えている後輩の皆さんには、実習は大変という先入観よりも、どうやったら楽しく実習ができるかを考えてほしいです。実際に、不安や大変なことはもちろんありましたが、看護を実施できることへの充実感や日々自分が成長していることを実感することで、想像していたよりもずっと楽しい実習となりました。それが現在の私のモチベーションへ繋がっています。また、勉強以外にも趣味やサークル活動、友人との交流など、自分を大切にする時間を作って、素敵な大学生活を送ってください。

4月からは看護師として働くことになりますが、これまでの経験や楽しむ気持ちを忘れずに頑張っていきたいと思います。最後になりますが、4年間の中で出会った友人や先輩、後輩の皆様、ご指導してくださった先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

卒業にあたって

看護学科第21期生　榎　本　いずみ

大学に入学してからの4年間はあっという間でした。それだけ充実していた4年間であったと思います。

高校までは、なかなか他者と意見交流する機会がなかったのですが、大学ではグループワークが多くあり、自らの考えを述べるのはもちろん、他者の考えを聞くことで、自分の考えが深まったり、視野が広くなることにつながったと思います。そのグループワークで学んだことや、深まった考えが実習に活かされました。

実習では、多くの対象者さんを受け持たせていただき、その方の個別性に合わせて看護を行うことを学びました。さらに、助産学課程を選択し、最後の年の4年生の時は、忙しい日々でしたが、知識や技術を身につけるだけでなく、責任を持って行動することを学びました。

以前、私は泣き虫で、何かある度に泣いていましたが、大学4年間を終えて、精神的にも強くなることができました。全ての実習を終えることができたのは、グループメンバーで互いに声を掛け合い、助け合いながら過ごしてきたからだと思います。仲間の大切さを改めて感じた4年間でした。

また、勉学だけでなく、部活動としてブラスアンサンブルに入り、高校まで続けてきた吹奏楽を続け、多くの先輩や後輩と関わり音楽を楽しむことで、大学生活がより充実していました。部活動では部長等の役職を経験し、団体で活動する難しさや、指示を出す難しさ等、社会に出てから必要なことを少しでも学んだような気がします。

最後になりますが、この4年間共に学んできた仲間や、ご指導いただいた先生方等に感謝を申し上げます。4年間で学んだことを忘れず、看護職として頑張っていきたいと思います。

卒業にあたって

看護学科第21期生　小　島　さやか

旭川医科大学での4年間は、充実した日々を送ることが出来ました。入学当初は「看護師になる」という目標のもと、期待に胸を膨らませていました。しかし、入学早々多くの課題を課され、時にはくじけそうになるときもありました。そんな中、初めての実習で先輩看護師の姿を見て、細やかな観察眼に驚くと同時に「自分もこんな看護師になりたい」と刺激を受けたことを今でも覚えています。2，3年生になるにつれて学習の専門性も増していき、実習では患者さんを受け持つことで疾患への理解だけでなく、必要な看護について学ぶ日々でした。日々状態の変化する患者さんに勉強が追いつかず、自分の知識不足・学習不足を痛感させられる毎日でした。そんな中でも様々な方々の支えがあって4年間頑張ることが出来たと思っています。中でも59名の同期は、とても良い刺激となり切磋琢磨し合える存在で、私にとってかけがえのない仲間だと感じています。

座学や実習を通して、地域に住むあらゆる人を対象とし、より広い視点から人の生活や健康を支える保健師という職種に興味を持ち始め、4年生からは公衆衛生看護を選択しました。その中で、公衆衛生看護の特徴を捉えるだけでなく、看護の共通性も学ぶことができました。また、実習を通して多くの先輩保健師と触れ合うことで、自分が目指したい保健師像が明確になっていきました。4月からは保健師として仕事をする予定であり、いよいよ看護職者の一員となる期待と不安が入り混じっていますが、4年間の学びを忘れず対象者と真摯に向き合っていきたいと思っています。

4年間の大学生活を充実したものにできたのは、熱心に指導して下さった教員の方々、共に考え学んできた同期、病院や地域で働く先輩看護職者の方々、いつも応援してくれた家族等、様々な方々の支えがあったからこそであると感じています。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

私の大学4年間

看護学科第21期生　佐々木　彩　乃

希望の匂いに胸を膨らませ大学の門をくぐったあの日から、早いもので季節は4周し、この春無事に卒業を迎えることができました。大学生活を振り返ると積み重ねてきた1日、1日が私の財産になっています。

入学したばかりの頃は、緊張感のある講義や演習、これでもかというほど容赦ない課題の量に愕然としていました。そして、気が付くと勉学の場は机上から病棟に、時代は平成から令和にかわっていたほど毎日が一瞬で全力でした。

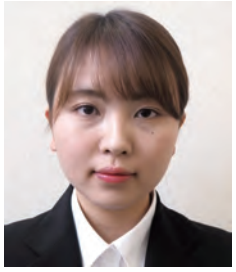
実習では、自身の無力さや不甲斐なさに直面し、病棟から帰って看護記録を書いているとパソコンの文字がぼやけてくる日もありました。でも、お別れの時には涙を流して「ありがとう、頑張るんだよ。」と温かい言葉をかけてくださった患者さんの声や表情を思い出すと今でも胸がじんわりと温かくなり何とも言えない感情が湧きあがってきます。このようなかけがえのない経験から、命に向き合う看護職の厳しさ、そしてやりがいを身をもって感じることが出来ました。また、低学年の頃は「怖い、鬼だ、、。」という思いしかなかった教員の方々の厳しい指導も本当の優しさだったのだと分かるようになりました。在校生の皆さん、安心してください、大丈夫ですよ。大学生活はあっという間なので辛い日もあると思いますがとにかく明るく楽しみましょう。

最後に、この場をお借りして感謝を伝えたいと思います。4年間このような素晴らしい環境のもとで勉強も遊びも思いっきり楽しむことが出来たのは、何事も応援してくれた両親、厳しくも温かい指導をしてくださった教員の方々、いつも支えてくれた大好きな友人や先輩・後輩のおかげです。本当にありがとうございました。

4月からは北海道で保健師として新たな一歩を踏み出します。大学生活で得た学びを糧に、地域で生きづらさを抱えながら生活している方々の力になれるよう、誠実さ、謙虚さ、そして周囲の人に対する感謝を忘れずに精進していきます。

卒業にあたって

看護学科第21期生　土　屋　瑠　奈



旭川医科大学に入学して過ごした日々は、あっという間に過ぎ、無事に卒業を迎えることができました。

入学時は、小さい頃から憧れていた助産師になるという目標に向かって意欲に満ち溢れていましたが、思っていた学生生活と異なり、悩むことが多かったように思います。入学してからは日々の課題に追われ、本当に助産師になることができるのか、そもそも看護職者になるという選択はあっていたのかという不安を持ちながら、毎日最低限のことをこなす日々を送っていました。しかし、実習において自分の力不足や勉強不足を感じ、患者さんにとって力になれていないことに対して申し訳なさを感じることが多く、このままではいけないと強く思いました。そのため、まずは看護師として十分に患者さんの力になれるようになってから、その後のキャリアを考えたいと思いました。私は優柔不断で、悩むことが多くありましたが、さまざまな経験の中で多くの選択肢をもって悩んだからこそ、自分の納得のいく選択ができたと感じます。これから実習を行う後輩の皆さんにとって、実習はつらいことも多く、悩むこともあるかと思います。しかし、まだ時間はたくさんあるので、焦らずこの自由に使える時間の中で、学習だけでなく多くの経験をして、自分の選択肢を増やすことをお勧めします。

この4年間を終えて、自分が看護師に向いているのかはわかりませんが、大学生活での多くの経験は、今後の人生にとって大きな財産になったと思います。そして、大学生活を充実したものにできたのは、看護というものを教えてくださった先生方、一緒に勉強したり相談にのってくれた友人、支えてくださった先輩、後輩、そしていつも私を見守っていてくれた家族のおかげと思っております。これからは、看護師としてだけでなく人間としても成長し、今までの学びを活かして一人ひとりの患者さんに寄り添った看護ができるよう、頑張りたいと思います。

卒業にあたって

看護学科第21期生　西　田　直　生

旭川医科大学に入学し早4年が経ち、卒業を迎えました。

私が本学で過ごした4年間で最も印象深い1日は入学式の当日でした。1学年60人のうち男子学生が自分一人だと気が付いた瞬間は今でも鮮明に覚えています。私の家族は「やめても仕方がない。」と思っていたそうです。正直なところ私自身も「無理なのでは。」と感じていました。そんな私でしたが、優しくそして時に厳しく、なによりも生徒の成長を考えてご指導してくださった先生方、明るく何でも相談し合える素敵な同輩に支えられ、この上なく充実した4年間を過ごすことができました。卒業を迎える今、4年間を振り返ると、自分はとても環境に恵まれていたことを実感し、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

入学から卒業までを振り返ると、課題や実習の記憶が思い浮かぶ一方で、大変なことも協力し合い乗り越えたことや、毎日のように部活動に取り組んだことも思い出されます。楽しかった思い出だけでなく、辛かった記憶も含めて、すべての出来事が4年間の学生生活の充実につながっていたと思います。

私は元々、看護師を目指して本学に入学しましたが、実習を通して関わらせていただいた方々にはそれぞれの人生があり、考え方や大切にしていることも様々だと感じると同時に人と関わる面白さも感じました。そうした中で沢山の方の人生に触れて、その方の健康を少しでも近くで支えたいと思い保健師となることを決めました。自分のなりたい看護職者としての姿を考え、その姿を目指せる環境であったことを有難く思います。ご指導いただいた先生方をはじめ、大学生活を支えてくださった関係者の皆様、4年間大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

4月からは保健師として勤めますが、4年間お世話になった方々への感謝の気持ちを忘れずに、一日一日を大切に保健師としてだけでなく人としても成長できるよう努力していきたいと思います。

令和元年度定年退職教授による最終講義が行われました

令和2年3月31日をもって本学を定年退職された先生のうち４名の最終講義が令和2年2月に行われました。講義では、長年にわたる教育・研究生活を振り返りながら、想いを込めて語られました。各講義とも本学学生や教職員の他、大学関係者などが多数聴講に訪れ、思い出深い最終講義となりました。講義終了後には、感謝の意を込めて花束が贈呈され、参加者から大きな拍手が送られました。

先生方のこれまでのご尽力に、学生、教職員、卒業生一同心から感謝するとともに、今後のご健勝と益々のご活躍をお祈りいたします。

≪産婦人科学講座　千石　一雄　教授≫

講義題目：「旭川医大で過ごした 40 有余年を振り返る」
開催日時：令和２年２月 13 日（木）15：30 から
場　　所：臨床講義棟　臨床第３講義室

≪生理学講座（自律機能分野）髙井　章　教授≫

講義題目：「私の生理学 40 年」
開催日時：令和２年２月 14 日（金）15：30 から
場　　所：臨床講義棟　臨床第３講義室

≪呼吸器センター　大崎 能伸　教授≫

講義題目：「呼吸器診療のレボリューション」
開催日時：令和２年２月 19 日（水）15：30 から
場　　所：臨床講義棟　臨床第１講義室

≪精神医学講座　千葉　茂　教授≫

講義題目：「**No Art, No Life**」
開催日時：令和２年２月 27 日（木）15：30 から
場　　所：臨床講義棟　臨床第１講義室

学部学生海外留学助成制度を利用して

医学科第３学年　土　田　勇　気

この度、フィリピン共和国のセブ市にあるMeRISE English Academyにて、3週間の語学留学をさせていただきました。留学の動機は、将来的に医学留学を希望しているため、事前に英語の基本的なスピーキング能力を向上したいと考えたからです。また、リーディングやライティングに関しては、大学受験の際に取り組みましたが、英語を話すトレーニングに関しては受けたことも、実践した記憶もないため、一度、集中して指導を受けてみたいと常々思っておりました。

語学学校では、マンツーマンレッスン、他の国の生徒とのグループワークを英語のみで実施しておりました。最初の1週間は、外国人の先生や他の生徒と満足に英語でのコミュニケーションがとれず苦労しました。毎日、自分の伝えられなかったこと、使えなかった表現をまとめ、その日の反省を英語で録音し、先生に添削してもらいました。次第に、環境に慣れ、落ち着いて英語を聞き取れるようになり、相手の伝えたいことを理解できるようになりました。その上で、インプットした表現を積極的に試して、会話が少しずつ続くようになり自信になりました。最終週では、全校生徒の前で、英語でのプレゼンテーションに挑戦し、とても貴重な経験をさせていただきました。

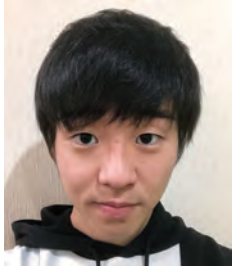
今回の留学では、経験からしか学ぶことのできない気づきを得ることができました。語学力の向上は、中途半端な気持ち、時間の使い方では達成できないと言うことです。固い動機を持ち、学習のゴール設定を明確にし、とにかく自信を持って発言することが必要だとわかりました。間違いを恐れずに、積極的に発言し、たくさん間違えて修正するという遠回りが使える英語力の習得への最短距離だと思います。今後の英語学習にも、この姿勢を取り入れ、語学能力の向上に努めていきたいと考えております。

また、留学中は人からの理解を得るために、自分の伝えたいことを簡潔にまとめるように努力しておりました。これは英語に限らず、医師として働く際に、わかりやすく物事を伝えるために必要な考え方だと思いました。引き続き意識して、取り組んでいきたいと思います。

この度は、学部学生海外留学助成事業を利用することにより、貴重な経験を得ることができました。ご寄付によりご支援くださった皆様に、心より感謝申し上げます。

学部学生海外留学助成制度を利用して

医学科第４学年　阿　部　　光



この度、私は学部学生海外留学助成制度を用いて令和2年3月から四週間、IFMSAの基礎研究留学プログラムに参加させて頂きました。

私は今まで留学経験がなく、大学入学を機に英語を使える環境に身を置いて英語力を高め、そして海外での生活を通して視野を広げたいと思い、医学生による国際学生団体「IFMSA」の留学プログラムに応募しました。ドイツを留学先として選んだ理由ですが、欧州の大学は本邦のものと比べて非常に歴史が長く、また日本の近代医学がドイツ由来であることから、ドイツの医学生たちがどの様に学んでいるのかを一度この目で見てみたいと思っていたためです。

私が滞在したのは、ドイツ南部の都市、チュービンゲンのエバーハルト・カール大学です。人口8万人ほどの小さな都市ですが、その1/3から1/2が大学関係者というドイツの中でも代表的な学術都市です。研究所では修士課程や博士課程の学生と共に、彼らの補佐として様々なことを体験させていただきました。

研究のテーマは、骨を構成する細胞についてであり、簡単に言えばタバコの煙が骨の形成過程にどの様な影響を及ぼすか、というものです。慣れない専門用語が多い英語での生活に最初は苦労しましたが、最終的には必要な実験のほぼ全てを一人でやらせて頂ける様になりました。そしてその過程で基礎研究として成果を出すことの大変さを身を以て体験しました。細胞の培養・管理から始まり、その後は染色や遺伝子の検査と、多種多様な実験を行います。それらの過程を何サイクルか繰り返してようやく論文の執筆に取りかかれるのだそうです。研究には勿論、才能や閃きといったことも必要かもしれませんが、それ以上に根気強く継続する力と、結果を見極める判断力が必要であると感じました。

最後になりますが、この度は旭川医科大学基金の寄付者の皆様のご支援のおかげで貴重な体験をすることができました。この様な機会を与えていただいた支援者の皆様をはじめ、留学を支援していただいた全ての方に心から御礼申し上げます。これからも旭川医科大学の学生のためにご支援のほどよろしくお願い致します。

卒業生の動向（医学科）

令和2年3月25日（水）に本学を卒業した学生の進路状況は次のとおりです。
なお、個人情報保護法関連法律等の関係で氏名は掲載しておりません。

（学生支援課）

区分		大学及び病院名等	令和元年度卒業生		
			男	女	計
進学	小計		0	0	0
就職	道内	本院（旭川医科大学病院）	28	13	41
		北海道大学病院	0	2	2
		その他	31	12	43
		計	59	27	86
	道外	大学関係病院	4	0	4
		その他	13	10	23
		計	17	10	27
	小計		76	37	113
未定・その他			11	6	17
合計			87	43	130

上記以外の病院名

道内：市立旭川病院、旭川赤十字病院、旭川厚生病院、旭川医療センター、
名寄市立総合病院、北見赤十字病院、深川市立病院、砂川市立病院、
北海道医療センター、市立札幌病院、札幌北辰病院、札幌東徳洲会病院
札幌徳洲会病院、斗南病院、勤医協中央病院、小樽市立病院
函館中央病院、製鉄記念室蘭病院、日鋼記念病院

道外：奈良県立医科大学附属病院、埼玉医科大学総合医療センター、
自治医科大学附属さいたま医療センター、仙台市立病院、大崎市民病院、埼玉病院、
船橋二和病院、亀田総合病院、総合病院国保旭中央病院、
国立病院機構災害医療センター、聖路加国際病院、長野中央病院、長野赤十字病院、
南長野医療センター藤ノ井総合病院、佐久間総合病院佐久間医療センター、
刈谷豊田総合病院、南生協病院、神戸労災病院、近江八幡市立総合医療センター、
大阪市立総合医療センター、堺市立総合医療センター、京都民医連中央病院、
倉敷中央病院、浜の町病院、熊本赤十字病院

卒業生の動向（看護学科）

令和2年3月25日（水）に本学を卒業した学生の進路状況は次のとおりです。
なお、個人情報保護法関連法律等の関係で氏名は掲載しておりません。

（学生支援課）

区分			大学及び病院名等	令和元年度卒業生		
				男	女	計
進学	道内			0	0	0
	小計			0	0	0
就職	道内	看護師	本院（旭川医科大学病院）	0	26	26
			北海道大学病院	0	1	1
			札幌医科大学附属病院	0	0	0
			その他	0	6	6
		保健師	地方自治体	1	9	10
		助産師	本院（旭川医科大学病院）	0	3	3
			その他	0	0	0
		計		1	45	46
	道外	看護師	大学関係病院	0	5	5
			その他	0	5	5
		保健師		0	1	1
		助産師		0	1	1
		計		0	12	12
	小計			1	57	58
未定・その他				0	1	1
合計				1	58	59

上記以外の病院名および自治体名

道　　内：手稲渓仁会病院、天使病院、旭川市、北見保健所、釧路保健所、苫小牧保健所、鷹栖町、豊浦町、北竜町、豊頃町、幌延町、釧路町

道　　外：自治医科大学附属さいたま医療センター、昭和大学病院、東京小児療育病院、板橋中央総合病院、横浜市立みなと赤十字病院、がん研究会 有明病院、東京歯科大学市川総合病院、筑波大学病院、国立育成医療研究センター、相模原市

教　員　の　異　動

令和２年３月26日	昇任	病院第二内科	准教授	麻　生　和　信
令和２年３月26日	昇任	医学部内科学講座（病態代謝内科学分野）	講師	岡　田　充　巧
令和２年３月26日	昇任	医学部内科学講座（病態代謝内科学分野）	講師	北　野　陽　平
令和２年３月26日	昇任	医学部内科学講座（病態代謝内科学分野）	講師	岡　本　健　作
令和２年４月１日	昇任	医学部皮膚科学講座	准教授	岸　部　麻　里
令和２年３月31日	定年退職	医学部生理学講座（自律機能分野）	教授	髙　井　　章
令和２年３月31日	定年退職	医学部薬理学講座	教授	牛　首　文　隆
令和２年３月31日	定年退職	医学部精神医学講座	教授	千　葉　　茂
令和２年３月31日	定年退職	医学部小児科学講座	教授	東　　寛
令和２年３月31日	定年退職	医学部外科学講座（肝胆膵・移植外科学分野）	教授	古　川　博　之
令和２年３月31日	定年退職	医学部産婦人科学講座	教授	千　石　一　雄
令和２年３月31日	定年退職	病院経営企画部	教授	廣　川　博　之
令和２年３月31日	定年退職	病院呼吸器センター	教授	大　崎　能　伸
令和２年３月31日	定年退職	入学センター	教授	坂　本　尚　志
令和２年３月31日	定年退職	医学部看護学講座	准教授	児　玉　真利子
令和２年３月31日	定年退職	病院外科（血管・呼吸・腫瘍）	講師	宮　本　和　俊
令和２年３月31日	退職	医学部看護学講座	教授	伊　藤　幸　子
令和２年３月31日	退職	病院薬剤部	准教授	福　土　将　秀
令和２年３月31日	退職	病院第二内科	講師	安孫子　亜津子
令和２年３月31日	退職	医学部眼科学講座	講師	石羽澤　明　弘
令和２年４月１日	採用	先進医工学研究センター	講師	井　上　雄　介
令和２年４月１日	採用	医学部小児科学講座	特命教授	東　　寛
令和２年４月１日	採用	医学部外科学講座（肝胆膵・移植外科学分野）	特命教授	古　川　博　之
令和２年４月１日	採用	病院経営企画部	特命教授	廣　川　博　之